

アメリカ合衆国労働者教育運動史研究 その1

田村佳子

広島大学平和科学研究センター

History of Workers' Educational Movements in the United States (1)

Keiko TAMURA

Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

Workers' education in the United States started as a pioneering movement at the turning of the centuries, developed all over the country in the 1920's, and reached its height in of the 1930's. Women workers, college women, and activists of women's movements developed the workers education movement. With this development of Worker's education, women workers began to organize a labor movement for themselves.

At first, women workers were a point force for Workers' education within the young labor movement. Grudgingly admitted into organizations by men members, they had to prove they could be good trade unionists. To accomplish their goal they needed political and educational as well as economic opportunities. And as industry expanded and employment of women increased, trade unionism become more important to them. Assisted by the middle-class they were interested in the general advancement of their sex, and first sponsored a cultural program of education. In 1903, they formed the National Women's Trade Union

League and began to emphasize industrial information and instruction in methods of labor organization. And this organization started the "Training School for Active Workers in the Labor Movement" in 1914.

This study attempts to survey workers' educational movements until 1920 and examine their meanings for women workers.

はじめに

アメリカにおける労働者教育の歴史は19世紀末に始まる。一方、成人教育は、この時期までに、大学拡張、通信教育、公立夜間学校などの経験を経て、その制度化を確実に進めてきた。これらの成人教育は、職業教育と識字教育を主な目標としており、当時の労働者階級の教育要求を十分にみたしたものではなかったが、労働者教育運動が未成熟な段階においては、それと正面から対立するものでもなかった。

アメリカにおいて労働者教育と成人教育が対立する関係の中で相互に影響し、発展していくのは、1920年代以降のことである。1921年、アメリカの労働者教育運動の代表的な機関である、女性労働者のためのプリンマー夏季学校(Bryn Mawr Summer School For Women Workers in Industry)が創設され、これを契機に全米に労働者教育運動がひろがっていくこととなるが、この運動を担った労働者の多くは女性の移民であった。一方、成人教育においても、移民流入数がピークに達した20世紀初頭以降その重点を移民教育に移してきていたが、1910年代の労働運動の中心となったのが移民労働者であったことから、移民対策の必要性が痛感され、1921年には全米教育協会(National Education Association)に移民教育部(Department of Imigrant Education)が設置され、また1926年にはアメリカ成人教育協会(American Association for Adult Education)も設立され、まさにアメリカナイゼーションが成人教育の中心的課題となった。そして、ニューディール期には、労働者教育、成人教育、共にニューディール政策の一翼を担うこととなるが、そこでも、失業問題の把握、労働者を対象とした教育の内容と方法などをめぐり、労働者教育と成人教育との対立が見られたのである。

そして、ニューディール末期からの労働者教育への攻撃、第2次世界大戦、その後のマッカーシズムの旋風の中で、労働者教育運動は衰退、消滅していくこととなる。このように、アメリカの労働者教育の歴史は、イギリスなどに較べ、非常に短いものであるが、移民教育をめぐる成人教育との関係、ニューディール期における政策としての労働者教育の展開等、見るべき点が少なくない。また、労働者教育運動の主要な担い手が女性であった点も、アメリカ労働者教育運動史

の特質と言えらるだろう。

以上を概括し、以下のように時期区分を設定する。

- ① 萌芽期(19世紀末－1920年)
- ② 成立期(1921年－1932年)
- ③ 展開期(1933年－1938年)
- ④ 衰退期(1939年－1949年)

本論文では、萌芽期の労働者教育を概括し、労働者教育運動における女性の役割を検討することとする。

1. 萌芽期労働者教育の諸機関

① 労働者教育の始まり

アメリカにおいて労働者の教育要求を最初にとりあげたのは、労働組合ではなく、ユートピア主義者たちであった。南北戦争を境に公立学校が普及し、19世紀末までに成人教育の組織化もすすめられてきたが、1828年に結成された労働者党(Working Men's Party)は、公教育制度への無条件の支持を示していた。農民や商人、小工場主をふくむ労働者党にとって、「平等な知的権利とは全く同じ教育を受けること」¹⁾であり、労働者の独自の教育要求は認められなかったのである。労働者党に続き1886年に創立されたアメリカ労働総同盟(American Federation of Labor:以下AFLとする)も、同様な態度をとっていた。AFLは、熟練労働者を中心とした組合であり、女性労働者や未熟練労働者をほぼ排除していた。そして、AFLは熟練労働者の権利を守るための8時間労働制や賃金引上げなどの経済闘争にのみ固執する一方で、一切の政治闘争を拒否していた。すなわち、マーガレット・ホッジェンが指摘しているように「中産階級への仲間入り」を果すことに熱心であり、「機会均等という中産階級の合言葉に基づくどのような教育制度にも労働者の支持を強要する一方で、階級の違いに基づく教育要求の違いを意味するどのような改革にも反対した」²⁾のだった。

一方、ユートピア主義者たち、例えば、J.A. ウェイランド(J.A. Wayland)は、19世紀前半にロバート・デール・オーエン(Robert Dale Owen)やファニー・ラ

イト (Fanny Wright) らが実験農場を試みたテネシー川沿いの地に、ラスキン・コモンウェルズ・コロニー (Ruskin Commonwealth Colony) を1894年に設立した。そこでは、労働者とそのこどもたちが共に働き、基礎教育を受けた。同じ頃、キリスト教社会主義者のミラー夫妻はミズーリ州トレントンに寄宿制の労働者カレッジであるアベロン・カレッジ (Avalon College) を創立した。このアベロン・カレッジは1909年にイギリスにならってラスキン・カレッジ (Ruskin College) と改称された。このアベロン・カレッジは、その設立にあたって、AFLに援助を求めたが、労働組合の利益にはならないと拒否された。

そして、1989年には、フェビアン主義者であるトーマス・デビッドソン (Thomas Davidson) によって、ニューヨークにブレッドウィナーズ・カレッジ (Breadwinners College) が設立された。デビッドソンは受講生が「当時の社会的・経済的問題を正しくとらえ、自分自身の位置と役割を認識することを期待」³⁾し、一般教育と職業教育の併存を主張した。また、彼は労働者教育の根源は歴史における労働者階級の役割を教えることであると考え、歴史と社会学を特に重視した。しかし、デビッドソン自身は「極端な個人主義者であり、反労働組合主義者であり、反社会主義者」⁴⁾であり、「人間は魂を与えればどんな条件のもとでも幸福をひきだせる」⁵⁾と考えていた。デビッドソンにとっての労働者教育とは、教育 (= “魂”) を与えることにより労働者にその分をわきまえさせるためのものであって、けして労働運動の発展のためのものではなかったと言うよう。

② ランドスクールにおける労働者教育

以上で見てきたように、19世紀末の労働者教育においては、労働者の組織化は明確には意図されていなかった。それを目的とした最初の労働者教育機関は1906年に創立された社会科学ランドスクール (Rand School of Social Science : 以下ランドスクールとする) であった。20世紀に入り、急進的なドイツ人やユダヤ人移民がニューヨークに出現した。これらの人々の中には政治的理由により祖国を亡命してきた社会主義者が少なからずいた。彼らが1904年の大統領選挙での社会党の得票増を契機に社会主義をひろげようとニューヨークにランドスクールを設立することを提案したのだった。したがって、ランドスクールの目的は、「社会

主義と労働者の組織化の原理・目的、方法を研究する機関を設立することと同時に、労働者をより有効な労働者とするような教育と訓練を提供すること」⁶⁾であった。しかし、この目的を実行するためには、「運営は政党の干渉から切り離されなくてはならない」⁷⁾とされていた。したがって、受講生もまた、社会党員から党員でないものまで、急進派から、穏健派まで、そして学校教育の経験の長いものから短いものまで、老若男女さまざまであった。

教えられる科目は社会主義や労働運動が中心であったが、これらを理解するために科学的視点を育てることが必要とされ、生物学や地理学、物理学なども教えられていた。また、形式的な講義はタブーとされ、討論、試験、個人指導などが徹底して行なわれていた。こうした努力によって、ランドスクールは単なる社会主義の宣伝機関としてではなく、「アカデミックな教育機関として受け入れられてきた」⁸⁾のであった。

ランドスクールについて労働者の組織化をめざした教育を提供したのは、国際婦人服労働組合連盟 (International Ladies Garment Workers Union : 以下 ILGWU とする) と全国女性労働組合連盟 (National Women Trade Union League : 以下 NWTUL または WTUL とする) であった。これらが労働者教育にとりくみはじめたのは1910年代のことであるが、この時期の労働運動の中心であった世界産業別労働組合 (Industrial Workers of the World : 以下 IWW とする) でも労働者教育のとりくみが見られたが、第1次世界大戦中及び大戦後の弾圧とIWW自身の政治闘争の放棄という方針の誤りにより、組織自体が壊滅状態におちいり、労働者教育において見るべき成果は得られなかった。

③ YWCA・セツルメントにおける教育活動

また、「労働者教育と一般の成人教育の境界線上のもの」⁹⁾とされる YWCA やセツルメントでの労働者を対象とした教育活動は、どの労働者教育機関よりも早くからとりくまれてきた。これらは、19世紀後半にイギリスからアメリカに移植されたものだが、多くの未組織労働者との関係から、公立夜間学校の「教室での学習が労働者として市民としての毎日の学習の密接に関わる時、明確な食い違いが生じる」¹⁰⁾ ことに一早く気づき、「歴史や経済学の知識をもたないまま、大き

な産業中心地における責任や生活と労働の問題に直面する若い人々に、明確に考えるための¹¹⁾教育を提供する必要を痛感していた。YWCA とセツルメントの教育活動はどちらかといえば、インフォーマルなものが多かった。レクリエーションや討論に重点がおかれていた。参加者の多くは女性労働者であったが、彼女たちはこうした討論から職場の問題や労働組合の組織化、地域における消費者問題や人種問題などを自分たちの課題として考えるようになった。また、ILGWU や合同被服労働組合 (Amalgamated Clothing Workers : 以下 ACWA とする)、全国靴下製造業労働者同盟 (American Federation of Hosiery Workers : 以下 AFHW とする) などの労働組合はこうしたセツルメントや YWCA と提携し、労働者学級を開いていた。これらの他に様々なキリスト教の団体、例えば、カトリック労働組合連盟 (Association of Catholic Trade Unionists) や組合協会全国会議 (National Council of Congregational Churches) なども、キリスト教の理想に基づく新しい世界の建設へ労働者を導く事を目的に、機関誌に労働問題に関する調査を発表したり、教区学校で労働者学級を開いたりしていた。

2. 1910年代における女性労働者の運動

① 全国女性労働組合連盟の成立

以上で見てきたように、1920年までに様々なタイプの先駆的な労働者教育機関が生まれたが、それらの中でも、その後のアメリカの労働者教育に大きな影響を与えたのは、NWTUL であった。ここでは、NWTUL の成立とその1910年代の動きを見ていく。

20世紀初頭のアメリカにおいて、工業全体の労働力人口の14%、綿紡績業の労働力人口の42%が女性労働者であり、その多くは移民であった。その後も労働力人口は増え続け、とりわけ第1次世界大戦時には、男性がいなくなった職場に女性が進出し、あらゆる職場で女性が見られるようになった。これらの女性労働者の職場の多くが「スエット・ショップ」と呼ばれる劣悪な環境にあった。労働時間の制限、深夜労働の禁止、最低賃金制などの労働立法の成立は、東部・中西部では1920年代前半、南部では1920年代後半に集中しており、1910年代まで、女性

労働者は、蒸気とほこりにまみれた職場で、逃亡しないよう外から鍵をかけられ、一日10時間、時には深夜まで働き、男性労働者の6割に満たない賃金を得ていた。

しかし、AFLは白人男性の熟練労働者の労働条件の改善には熱心であったが、女性の労働については、「こづかい稼ぎの仕事」(pin-money work)にすぎないが、男性労働者の雇用を脅かすものであるとし、時には女性の雇用や男女同一賃金に反対する決議を大会で行っていた。

したがって、女性の労働条件を改善するためには、女性労働者自身の組織を作る必要があった。こうして、八時間労働制や深夜労働の禁止などの労働立法の制定と女性労働者の組織化を目的として、1903年にNWTULが創設された。このNWTULの創設にはAFLのオーガナイザーであった印刷工のマリー・ケニー(Mary Kenny)、セツルメントのジェーン・アダムス(Jane Addams)や社会主義者のウォーリング(Walling)、後に労働省婦人局長となったメアリー・アンダーソン(Mary Anderson)、ニューヨーク州労働局長となったローズ・シュナイダーマン(Rose Schneiderman)らが参加し、初代会長にはローズ・シュナイダーマンが就任した。アメリカ女性史・女性労働運動史研究において、NWTULは常に重要な組織として評価されてきたが、時には労働組合として、時には19世紀後半に発展した中間層の女性の親睦団体である女性クラブの一つとして位置付けられてきた。NWTULは個人加盟制をとっており、その会員には女性労働者もいれば、中間層の女性も多くいた。主な活動は女性のための労働立法の制定のための運動やストライキ資金の援助であったが、女性参政権運動や平和運動も展開していた。NWTULは、労働運動と女性の市民運動を結合した組織であったと言えるだろう。

このようなNWTULは、AFLから財政援助を受け、またAFLの大会にもオブザーバーとして参加していたが、女性の労働の位置付け、1910年代のストライキ闘争支援や平和運動、1920年代の労働者教育運動の分裂などをめぐっては、AFLと対立していた。

アメリカ労働運動史における最大のストライキの一つは1909年から1910年にかけてのニューヨークとフィラデルフィアにおけるストライキであった。このストライキには三万人が参加し、その内80%が女性労働者であり、多くがロシア系移

民であった。また、1912年には、ローレンスでも三万人の被服労働者のストライキが行なわれたが、ここでもその半数以上が女性労働者であった。これらのストライキを指導したのはIWWであったが、NWTULはこれを支持し、ストライキ資金の援助や炊きだしを行なった。こうしたNWTULの活動に対しAFLは、「WTULの指導者たちは非原則的であり、IWWの影響下にある」¹²⁾と非難した。

② 女性による平和運動

また、第1次世界大戦へのアメリカ参戦についても、AFLのゴンパース会長らは1917年にアメリカ労働民主同盟(American Alliance for Labor)を結成し、これを支持した。また女性参政権運動の主要な組織であったアメリカ婦人参政権協会(The National American Woman Suffrage Association:以下NAWSAとする)も、アメリカ参戦を支持し、会長のアンナ・ハワード・ショー(Anna Howard Shaw)は政府の要職に就き、他の会員も赤十字などを通じて戦争に協力した。しかし、NWTULは労働運動は平和運動であるべきだと考え、多くの女性団体と共に平和運動を展開した。NWTULは、1914年には、ニューヨークで女性平和行進を組織し、数ヶ月後には、女性参政権運動のもう一つの主要な組織である全国女性党(National Woman's Party)などと共に女性平和党(Women's Peace Party)を結成した。この議長にはジェーン・アダムスが就任した。

また、NWASAのアンナ・ショーらが参加した1914年の国際女性参政権同盟(International Suffrage Alliance)のベルリン会議に失望した各国の女性たちが、1915年4月にハーグで国際女性会議(International Congress)を開催した。アメリカからは57名が代表として出席し、ジェーン・アダムスが議長団の一人として選ばれた。この会議は、女性参政権と国際協力とこどもの教育の権利を要求すると共に、国際女性恒久平和委員会(The Women's International Committee of Permanent Peace)を設立し、反戦を訴えた。

③ 労働条件改善への一歩——戦時労働政策局の勧告

一方、第1次世界大戦下での女性の職場進出とNWTULなどの女性の運動により、政府も女性労働者の労働条件に目を向けざるを得なくなり、戦時労働政策

局(The War Labor Policies Board) は1919年次のように勧告した。¹³⁾

I 労働時間

- 1 女性の雇用は1日8時間、週48時間を越えてはならない。
- 2 土曜日の労働時間は半日とする。
- 3 すべての女性労働者に週1日の休暇を保障すること。
- 4 食事時間は最低45分以上とすること。
- 5 短くとも10分間の休憩時間を設けること。
- 6 午後10時から午前6時までの女性の雇用を禁止する。

II 賃金

- 1 男女同一労働同一賃金であること。
- 2 最低賃金は本人だけでなく扶養者も含め生活できる賃金であること。

III 労働条件

- 1 衛生——水洗トイレ、温水器等の設置。作業場、更衣室、休憩室、食堂の分離。十分な採光。暖房設備、飲料用水、ベンチの設置。
- 2 作業姿勢——一日中、座っている仕事、立っている仕事に注意を払うこと。適切な高さで背もたれつきの椅子が設置されること。
- 3 安全——機械による事故、火災、ほこり、大気汚染の害に対し、連邦及び州政府の基準を守ること。火災訓練及び労働者の安全教育を実施すること。
- 4 改善すべき条件—— a) 身体に緊張を生じさせる姿勢あるいは一日中立っている姿勢。 b) 重い物を繰り返し持ち上げる作業、あるいは、極度の疲労をもたらす作業。 c) 強い力を必要とする機械の運転。 d) 過度の高温、過度の低温。 e) 安全対策を施さない場合のちり、ガス、その他有害物質。
- 5 女性の雇用を禁ずる仕事——女性に有害な物質を扱う仕事。
- 6 健康と安全のために必要な帽子・靴等を労働者に提供すること。

IV 家内制工場

生活及び睡眠のための部屋を作業場としないこと。

V 雇用に関して

- 1 解雇、異動及び労働条件は雇用主と労働者の協議により決定されること。
- 2 女性が雇用されている職場では、女性の監督官が採用されること。
- 3 労働者に仕事を選択する自由を与えること。

VI 基準の強化における労働者との協議

雇用主と労働者の協議の上で、労働条件等が決定されること。

VII 公的機関との協力

労働時間、賃金、雇用及び訓練を含む労働条件を扱ってきた連邦及び州政府と各地域の機関は、戦後復興に関し、労働問題の処理を援助すること。

労働省婦人局を設置すること。これは女性の雇用に関し調査を行ない、労働問題に際し、直接に、あるいは連邦及び州政府の機関と協力し、解決にあたること。

以上の勧告の内容は NWTUL 結成時の綱領に記された要求を全面的に認めたものであり、この勧告を受け、1920年に設置された労働省婦人局初代局長には、NWTUL のメアリー・アンダーソンが就任した。そして、1920年代以降の女性を中心とした労働運動の中で、多くの州において労働時間の制限や深夜労働の禁止、最低賃金法などの立法化が進むこととなる。

3. 女性の労働者教育運動

① 全国女性労働組合連盟における労働者教育

こうした1910年代初期の労働運動について、NWTUL はその特徴を「あらゆる職場で女性労働者が増加したことと紡績業におけるストライキの成功」¹⁴⁾ととらえ、「これらのストライキの大多数を占めていた女性労働者が組織化のための訓練を行なうことにより、ストライキでの成果が維持され得る」¹⁵⁾と考え、1911年から各地方支部で夜間学級を持ち始め、1914年には、シカゴに労働運動活動家養成学校を開校するようになった。この学校は、「労働運動に積極的に参加する事を希望する女性たちが幅広い労働組合活動を行なえるように、教育と実践の場

を提供する」¹⁶⁾ことを目的とした1年間の寄宿制の労働学校であり、受講者に合わせ、より短期間のコースや通信教育コースも提供されていた。また、NWTULは、イギリスにおける「労働者教育協会(Workers' Educational Association)と大学との協力が労働者教育運動の基調である」¹⁷⁾と考え、シカゴ大学とノースウェスタン大学に協力を求め、教育方法においても労働者教育協会にならない、チュートリアルクラスを採用した。最初の4ヶ月間は、NWTULのメンバーによって労働運動の理論や簿記などの職業教育が、また、大学の協力で経済学や労働運動史が、YWCAや公立学校の協力で英語やフランス語が、教えられ、残りの8ヶ月間はフィールドワークにあてられた。これらの受講料や受講者の生活費、シカゴまでの往復の旅費はNWTULによって集められた資金や労働組合のカンパで賄われた。

受講者の人数は少なく、1914年から1923年の間に32名¹⁸⁾が在籍したにすぎないが、NWTULは、その組織自体が女性労働者と中間層の女性の協力の下に成立・展開した組織である点、また、大学に労働者教育への協力を求めた点等、1920年代以降の労働者教育運動に多くの成果を残した。

② 国際婦人服労働組合連盟における労働者教育

また、ILGWUは労働組合内の労働者教育において最も長い歴史をもつ労働組合であった。ファニア・M・コーン(Fania M. Cohn)によってILGWUに教育部(Educational Department)が設置されたのは1916年だった。この教育部の活動は、「労働者の希望や目的は、経済と教育の分野における労働者自身の努力によってのみ認識されるという確信と、組織が労働者に力を与える時、真の教育は労働者にその力を知的かつ有効に使う能力を与えるだろうという確信」¹⁹⁾に基づき、展開された。ILGWUでは、ILGWUの歴史、労働運動史、労働組合論、女性労働問題、心理学やアメリカ文学などを公立学校教師によって教える労働者カレッジ(Workers' College)や8つの労働者統一の家(Workers Unity House)や労働者のこどものための実験学校(Experimental School for Children Manumit)や労働者芸術奨励委員会(Workers' Scholarship Committee)などの労働者教育活動がとりくまれていた。

ILGWU の教育活動は女性だけを対象としていたのではないが、被服業という性質上、女性労働者の参加がほとんどであった。また、ACWA や AFHW など紡績業関係の労働組合においても教育部がおかれ、多くの女性労働者が労働者教育に参加した。

おわりに

以上で述べてきたように、アメリカの労働者教育運動を担ってきたのは女性であった。とりわけ、NWTUL および ILGWU は1920年代以降もその活動を継続するとともに多くの労働者教育機関に影響を与えることとなった。この両者が労働者教育を開始した1910年代にはアメリカ労働運動史に残る多くのストライキが行なわれたが、これらのストライキに参加した多くの女性労働者も、労働者教育運動を担った女性労働者も、その多くは、被服業・紡績業に従事する移民女性であり、これらの人々は公教育の領域においても、AFL を中心とする労働運動においても疎外された存在であった。こうした底辺の移民女性労働者が、中間層の女性と協力し、労働者教育運動のパイオニアとなり、また、女性労働運動・労働者教育運動と、参政権運動や平和運動など様々な市民運動との連携が行なわれた点がまさにアメリカ労働者教育運動史の重要な特質の一つであったと言えるだろう。こうした点は、1920年代以降さらに発展し、女性の労働運動及び労働者教育運動はニューディール政策へと反映されていくこととなるが、これらの検討については今後の課題としたい。

註

- 1) Margaret T. Hodgen, *Workers' Education in England & The United States*. (London: Kegan Paul, Trench, Frubner & Co., LTD, 1925) p. 172.
- 2) *Ibid.*, p. 182.
- 3) *Ibid.*, pp. 212-213.
- 4) Marius Hansome, "The Development of Workers' Education." Theodore Bramelo ed., *Workers' Education in the United States*. (New York and London: Harper & Brothers

- Pulishers, 1941) p. 54.
- 5) Margaret T. Hodgen, *op. cit.*, p. 213.
 - 6) "Rand School of Social Science." Rand School of Social Science ed., *American Labor Yearbook 1923-24*. (New York) p. 225.
 - 7) Marius Hansome, *World Workers' Educational Movements*. (New York: Columbia University Press, 1931) p. 301.
 - 8) T.R.Adam, *The Worker's Road to Learning*. (New York: American Association for Adult Education, 1940) p. 134.
 - 9) *Ibid.*, p. 44.
 - 10) Florence Hemly Schneider, *Patterns of Workers' Education.—The Story of the Bryn Marw Summer School*. (Washington D.C.: American Council on Public Affairs, 1941) p. 44.
 - 11) *Ibid.*, p. 44.
 - 12) James J. Kenneally, *Women and American Trade Union*. (Montreal, Quebec: Eden Press Women's Publications, 1981) p. 81.
 - 13) U.S.Department of Labor, Woman in Industry Service, *First Annual Report of the Director of the Woman in Industry Service*. (Washington D.C.: Government Printing Office, 1919) pp. 27-29.
 - 14) "Training School for Women Organizers of the National Women's Trade Union League of America Preliminary Report" 1914, 5p *National Women's Trade Union League Papers.*, Schlesinger Library, Radcliffe College.
 - 15) *Ibid.*
 - 16) "Training School of the National Women's Trade Union League" 1923, 7p *National Women's Trade Union League Papers.*, Schlesinger Library, Radcliffe College.
 - 17) Margaret Dreier Robins, "Educational Plans of the National Women's Trade Union League" *Life and Labor.*, Vol. IV (June, 1914) p. 166.
 - 18) "Schedules-Short Course" 1923, 3p *National Women's Trade Union League Papers.*, Schlesinger Library, Radcliffe College.
 - 19) Marius Hansome, *World Workers' Educational Movements*. (New York: Columbia University Press, 1931) p. 226.